

巻 頭 の 辞

福井医科大学 学長

能 勢 善 嗣

本誌は今回で3号の発刊を見るに至った。号を重ねるごとに立派な論文が発表され、紀要の形態を整えるようになったことは誠に喜ばしい次第で、本誌編集委員の労を多としたい。

医科大学における一般教育科目等の目的は、巾広い教養を深め人間形成を目指すとともに、医学履習の基礎的知識を習得することにあると言われる。しかし、専門教育科目における専門知識の習得と違って教授内容が広汎に亘り、その履習や教授方法の把握にも困難な点が多いと思う。今日の医学は学問、技術ともに高度に進歩し、これを複雑な人間社会にいかに調和させるかが問題とされているが、医学とは何か、医療とは何かという体験を経ていない学生に医師としての人格の陶冶を要求することは具体的に難しいものと思う。医の倫理は学生自身が勉学の間に自ら掴み取るべきものである。

筆者の学生時代に、専攻が哲学である先生から独乙語を教わった。その頃は今の医科大学に比べて一般教養の期間が長かったし、独乙語の時間も今より数倍あり、かなり進んだテキストであった。先生はテキストの中に出てくるテーマについてよく脱線(?)され、自分の世界観を吐露され、学生も時間中にそれをねだったものである。一般教育における学生教育は教官の全人格的な発現にあると思う。これは必ずしも一般教育科目に限ることではないが、それぞれの科目において自己が日頃研鑽している専攻を通じて学生に訴えることにあると思う。

専門教育科目の分野にはその研究成果を発表する学会や発表機関が多い。しかし一般教育科目等では分野によっては限られており、本誌もその意味において本学開設当初から要望されていたものである。幸い高瀬武平前学長の努力により教授会の賛同も得て刊行費が予算化されて今日に至っているが、今後益々発展することを願う次第である。